さくらがわ地域医療センター

それぞれの患者さんの病状に合わせた医療看護を行う環境と設備を用意。

左右勝手に配慮した反転タイプの多機能トイレを並べ、患者さんに合わせて対応できる。

2Fの多機能トイレ。はね上げ手すり、背もたれ、L型手すりが備えられている。衛生管理に配慮し、便器は壁掛けタイプにこだわった。

2018年10月1日、茨城県桜川市が整備し、医療法人 隆仁会を指定管理者とした、さくらがわ地域医療センターがスタートしました。医師不足などによって今までの機能を維持することが困難になっていた県西地域の医療再編に伴い、筑西市に新たに誕生した茨城県西部メディカルセンターが2次救急の役割を担い、さくらがわ地域医療センターは1次救急の役割を果たしていきます。

来院しやすく地域になじむ建築とデザインが施され、建物のフォルムは筑波山の稜線をイメージしている。

地域に貢献する1次医療の拠点。震災の教訓を生かした災害対策も。

外来やリハビリの機能を中心とする当院は、一般病床が80床、うち10床を回復期機能を兼ねた地域包括ケア病床とし、長期治療が可能な療養病床を48床としています。屋外リハビリスペースなどの入院環境を整備し、看護師などが自宅に訪問して在宅での療養生活を支援する訪問看護ステーション、気軽に相談できる窓口となる患者支援センターや地域連携室も病院内に開設しました。

病棟は1フロア2看護単位とし、スタッフステーションから2方向が見渡せる配置に。療養病床とリハビリテーション室など、関連性の高いものを同じフロアにするなどの工夫を施しています。親しみやすく分かりやすい病院という姿勢は、サイン計画や職種ごとに色を変えたユニフォームなどにも反映されています。

また、震災の教訓も生かした災害対策を施し、雨水や井水を使えるように備え、上水として利用できる設備も用意。災害時にできるだけ非常用発電機を使わなくて済むように、電気を西と東の2系統から使えるようにするなど、さまざまな対策がなされています。

小児科の廊下や扉、照明などは、円のモチーフが優しいデザインで統一されている。

さくらがわ地域医療センター

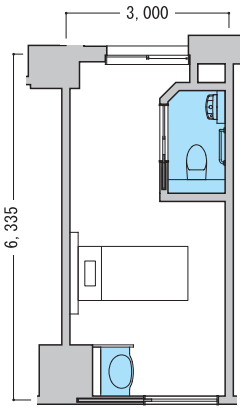
- ●竣工年月／2018年9月
- ●所在地／茨城県桜川市高森1000
- ●施主／桜川市
- ●設計／株式会社伊藤喜三郎建築研究所
株式会社andHAND建築設計事務所
- ●延床面積／10,401m²
- ●病床数／128床

受付の近くにある小児科の子ども用トイレ。ゾウの手すり兼ペーパーホルダーも。

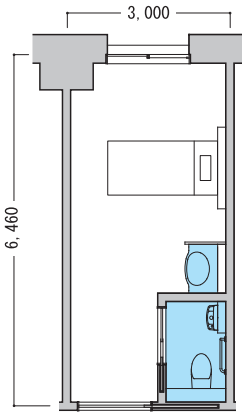
親しみやすく遊び心にあふれたオリジナルのサインが各所に施されている。

トイレを奥の窓側に設置したレイアウトの個室。トイレには背もたれ、L型手すりが備えられている。

トイレが手前の廊下側にある個室。個室の壁はベッドの高さまで腰壁で保護し、ベッドの搬出入の時などに傷が付かないように配慮している。



個室・Aタイプ 平面図



個室・Bタイプ 平面図

検尿用の男性用トイレ。小便器も壁掛けタイプ、床は巻き上げにするなど清掃がしやすい。

検尿用の車いすトイレでは、便座に座ったまま検尿提出口にカップを入れられる。提出口の扉にマグネットを使うと開けた時にバランスを崩す人もいるので、引き扉にした。

廊下の窓辺にあしらった壁の緑は、屋外の緑にも呼応。外を通る人も窓越しに見える、癒しの空間となっている。

スタッフステーションの出入口に設置された、水はねの少ないスタッフ用手洗器。

グリーンの床が心地よさを演出している、省スペースのスタッフ用トイレ。

スタッフステーションから左右を見渡せる、東西対称のT字型のレイアウトを採用。

トイレなどのサインは、どの方向からでも見やすいように工夫されている。

voice 看護部長さんからの声

病院スタッフも設計参加し希望を実現しました。

看護部長
大津恵美子さん

医療機関の少ない桜川市で、地域の皆さんのために整備された病院です。ここは1次救急の拠点で、他の医療機関との連携も大事になりますし、訪問看護などによる在宅支援も行っていきます。建築計画当初から病院側も設計に参加させていただき、希望はほとんど実現できたとうれしく思っています。他の病院を訪れて参考にさせていただいたので、ぜひここにも見学に来てもらえたらと思います。

voice 桜川市保健福祉部の方からの声

親しみのわく、市ならではの空間になりました。

桜川市 保健福祉部
健康推進課
市立病院グループ長
増渕孝明さん

病院設計の中では桜川市らしさも表現し、内外の壁に地元の石材である稲田石や真壁石を使用したり、国の名勝であり天然記念物の「桜川の桜」にちなみ外構に山桜を配置し、建物の一部にもデザインを取り入れたりしています。このエリアは、桜川・筑西IC周辺地区開発の一環となる介護福祉ゾーン。周辺には親水公園や住宅なども整備予定で、今後さらに複合開発による安心の街づくりが進みます。

voice 設計担当の方からの声

左右勝手や病状に配慮したトイレを備えました。

株式会社伊藤喜三郎建築研究所
設計本部 第一設計部 主任
山嵜舞さん

病棟の共用トイレと個室のトイレは、左右勝手それぞれに配慮したタイプを隣り合わせに配置しました。さらに病状によってトイレを手前の廊下側に配置したタイプと、奥の窓側に配置したタイプを用意。病状が比較的重度な患者さんは、スタッフがすぐにアプローチできるように、ベッドを手前にしています。モデルルームでは、トイレ内の手すりやスイッチまで安全を優先して配置を検討しました。